

カミを祀ること、守ること：八丈島中之郷 地区のイシバサマ信仰の事例から

土屋, 久 / TSUCHIYA, Hisashi

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

16

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2016-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012619>

カミを祀ること、守ること

— 八丈島中之郷地区のイシバサマ信仰の事例から—

土屋 久 (共立女子大学・順天堂大学兼任講師)

はじめに

八丈島中之郷地区上浦にあるK家は、地域の中でも古くからの家柄で、屋敷地の西側に、イシバサマと称される民俗神を今も大切に祀っている。その来歴はまったく分からないが、K家が守り、伝えてきているカミである。K家のイシバサマ信仰の在り様については、事例の項目で詳述するが、現在（2015年）、70代半ばのK.Yは、次の世代にも、このカミを祀り・守ることを伝えようとしている。

さて、本稿の目的である。本稿は、ヒトがカミを祀り、守ることの意味を自然環境との関わりの中に読み取ろうとしたものである。ヒトがカミを媒介として、自然環境との間に織りなす様相・様態の一端を、八丈島中之郷地区のイシバサマ信仰の調査を中心に考察したのが本稿ということになる。

1 イシバサマに関する先行研究と問題の所在

ここではまず、イシバサマに関する先行研究に触れながら、イシバサマとはどのような性格の民俗神であるのかを確認する。そして次に、はじめに述べた本稿の問題意識を、民俗学者の野本寛一の論に依拠しながら今少し掘り下げておきたい。

1-1 先行研究

イシバサマについて最も纏まった報告をしているのは民俗学者の大間知篤三で

ある。彼は1938年と1949年におこなった調査に基づいて次のように述べている。

屋敷神は屋敷の東北隅や西北隅に祀られてある。丸石やそげ石を置いたり、石垣の一部を凹まして祀つたりした極く簡素な形式のものが多く、石の小祠を置いたものもある。坂上では明治年代に村の氏神へ合祀したので、今は数少なく、坂下の二村にかへつて多く見られる。坂上の人々は、坂下には巫女が多いので新しく祀る者も多いのだと評する。坂下では屋敷神を普通にイシバサマと呼び、またテイシバサマともいふが、これらの語は榎立村でも聞いた。イシバといふ語は、本来祠の設けがなくて、単に自然石を置いた靈所を表はすものであつたのではないかと思われる。したがつて屋敷神を表す語ではなく、靈所の形態に關した名稱なのであらうが、今は石祠のある屋敷神をもみなイシバサマと呼んでゐる。もつとも中之郷では屋敷神を「氏神」とよんでゐた。

イシバサマにしろ「氏神」にしろ、それは屋敷を護り一家を守る神として古くから祀られてきたものである（大間知 1951:15-16）。

上記の引用文中に見られる石の小祠について付言しておく、大間知とともに共著をもした民俗学者の坪井洋文は、何かを祈願するために、奉納者の名前や神名を刻んで供えられているものが多いとも指摘している（大間知・金山・坪井 1966:272-278）。

また、1974年に東京都教育委員会から出された「特集 八丈島民俗資料緊急調査」という副題をもつ報告書の中で、野村亜子は、中之郷地区では屋敷神をチョウヤマと呼んでいた、として次のように報告している。

かつて中之郷の各家々の屋敷内には、チョウヤマと呼ばれる神が祀られていた。このチョウヤマには、どのような字があてられるかということとは明らかではないが、八丈島の他村落に伝えられるところのイシバサマに類似していて、浜から適宜な浜石（玉石）を拾い、それを屋敷の隅の小高いところ、もしくは入り口に据えて御幣を立てて祀つたという。藍ヶ里や上浦コーチ（コーチについては後述・土屋）の家々はうしろに小山がひかえているので、そのうしろの山に祀つたという。祭日は別れない。

そのチョウヤマの囲りにある木をモリギといい、その木を切ると盲になると言い伝えられ、絶対に切ることができず、怖れられていたという。

後年、チョウヤマは粗末に祀ってはならないという理由で、中之郷全戸のチョウヤマを三島神社に集め、ここに合祀した。しかしK家（原文は実名だがイニシャルに替えた－土屋）のチョウヤマは“三島神社には落ち着かない”という巫女の占いのため、一度合祀した後、再びK家（同前）の屋敷内に戻した。今ではこの家一軒がかつてのチョウヤマの様相を残している（野村 1974:74）。

2000年代に入ってから、筆者も度々、イシバサマについての調査をおこなってきた。その結果を踏まえて考えてみるに、イシバサマは、もともとは「靈所の形態に關した名称」であったものが、「石祠のある屋敷神」も含めてそう呼ばれるようになった、とする大間知の指摘は妥当であると思われる¹。また、この指摘は、筆者の調査の中においては、八丈島の5地区（後述）のすべてで確認することができた。しかし、中之郷地区で、屋敷神を「氏神」と呼んでいたと大間知が記していること、また、野村が報告する、イシバサマに類似するチョウヤマというカミが、同じく中之郷地区の屋敷内に祀られていたことに関しては、確認することができなかった。チョウヤマに関しては、筆者の調査では、イシバサマが祀られる森のことをチョウヤマといい、「チョウ山」という表記を当てることが確認されている。そして、中之郷地区においても、屋敷の隅に（西側が多かった）丸石や尖った石、または小祠を置き、それをイシバサマとして祀る例が見られた。こうした点を考慮に入れると、イシバサマと「氏神」、チョウヤマの区別は曖昧で、中之郷地区に祀られる屋敷神もイシバサマと考えて構わないと思われる。

2000年代に入ってから状況を付言しておく、イシバサマは、中之郷地区に限らず他の地区においても、そのほとんどが屋敷の片隅に忘れられたように残るか、または、先の野村の報告にも見られたが、各地域の氏神へ納めてしまって、かつてここに祀られていたという痕跡を残すのみとなっている場合がほとんどであり、実際に祀っている家は少ない。

1-2 問題の所在

環境民俗学の提唱者の一人である野本寛一は、かつて日本では地霊や精霊に対して細かな心遣いをしていたという。しかし、近代以降、とりわけ高度経済成長よりこの方、地霊・精霊は大変な憂き目にあっているとして、次のように指摘している。

地霊は本来、一定範囲に遍在するものと考えられるのだが、その凝結の場、凝結点があると考えるとよかろう。それは、先人たちの感性・心性・感

応力によって感知され、選ばれたものである。それは、岩であり、巨樹であり、淵であり、時には山でもあった。そして、それらは世代を越えて伝承され、多くの人びとの眼ざしと祈りを受け、語り継がれてきた。地霊凝結の場、地霊と他の精霊とが複合した聖なる場は固定化し、守り継がれた。

イエイエの屋敷神もムラの聖地もこうして生まれ、守り継がれてきたのである。しかし、廃屋が増え、廃れ、消えゆくムラムラが増してゆけば、特定の場に凝集された地霊や、小さな民俗神は、梯子をはずされ、忘れられ、やがて忘却の淵に沈むことになる。(中略)

人と地霊の相渉は、別な見方をすれば人と自然環境との相渉であり、それは人の姿勢によって変化する。地霊とのかかわりの放棄、地霊や精霊を忘れ去ることは環境破壊や環境の荒廃につながる。さればこそ、今、この国の先人たちが地霊・精・精霊・小さな民俗神などとうかがわってきたのかをふり返ってみなければならないのだ(野本 2010:3-4)。

本稿の問題意識は基本的に野本が上記で指摘していることと同じであり、「地霊・精・精霊・小さな民俗神」を媒介にした「人と自然環境との相渉」を考察しようとするものである。その際特に、森の木を切ってはいけないという禁伐伝承と防災の関係に焦点をあて上記の問題を考えていくこととする。野本は、日本の各地に、「地霊・精・精霊・小さな民俗神」が祀られ、禁伐伝承を伴う森を見ることができるとしている。禁伐伝承は森の保全につながり、森を守ることで山崩れや強風を防ぎ、水源の保持を可能にするのだと、指摘している(野本 同前:178-182)。

本稿で扱う八丈島の民俗神であるイシバサマの信仰にも、野村の先行研究同様に、森の木を切るな、との言い伝えがある。この森は、風の強い八丈島にあっては、特に防風の機能を果たしていると考えられる。

本稿では、野本が指摘する文脈にまずは従いながら、イシバサマ信仰を間に挟んだ、八丈島の島人と風との相渉の在り様を考察していく。

2 調査の概要

2-1 調査地と調査の時期

八丈島は、本土から南に287kmにあり、伊豆諸島南部に位置する。

伊豆諸島の中では伊豆大島について2番目に大きな島で、面積 69.52km²、周囲 58.91kmとなっている。人口は、2010年の国勢調査では8,231人、4090世帯で、減少傾向が続いている。また、地形的に八丈島は、西山（八丈富士・標高 853.3メートル）と東山（三原山・標高 700.9メートル）の二つの火山の噴火により形成された瓢箪型の火山島である。

島内は大賀郷、三根、檜立、中之郷、末吉の五地区からなり、前二者を坂下地区、後三者を坂上地区といている。行政や産業の中心は坂下地区にあるが、一般に、伝統的な信仰形態や風習は坂上地区に残っている。

本稿で調査をおこなったのは、中之郷地区である。この地区内部は伝統的に8つに地域に区分され、これらを「コーチ」や「部落」と呼んでいる。8つの名称は、藍ヶ江、藍ヶ里、尾越、中里、粥倉、上浦、向里、三原となっている。

筆者が調査をおこなったのは、この内上浦に位置するK家を主として、粥倉のK家、中里のK家である。中之郷を調査地とした主な理由は、イシバサマの伝統的な形態がかりうじて残っているのがこの地区であることである。特に上浦のK家は、八丈島の中でも上記の形態を今に伝えると考えられる数少ない家の一つである。

尚、本稿で使用するデータは、主に2005年および2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究(c)MO21520823によっておこなわれた調査、2015年におこなった確認のための追調査による。

2-2 八丈島の風

島の風の様子についても触れておこう。

流人の近藤富蔵（1805-1887）の手により纏められ、八丈島のエンチクロペディーとしての役割を果たしてきた『八丈實記』には、島人が風害を恐れ、屋敷の回りに石垣をつくり、木を植えていた様子が次のように描写されている。

此嶋大風ヲ恐れ、故ニ、坂下ノ大賀郷ト三根村ハ屋舗ノ四方皆石垣ナリ。高サ四五尺、幅六尺バカリ。焼石ナレドモ黒ニ似タリ。大岡郷菊池ノ四家、古代丸石ニテタ、ミタル石垣ニ大樹木カラミテイト苔フリタリ。檜立ニモ今丸石ヲ用ユルアリ。其上ニ風除ノ木ヲ植タリ。松、椿、タミ、マダミ、又ハクロブチ、ニワトコ、ハイ木、篠ナトモアリ。坂上ノ石少ナケレハ、ハン土ノ上ヲ其儘ニ切立、芝生ヲ茂ラシ、上ニハ椎、マタミ等ノ大木ヲ、ヘリ。又檜立イゴウナノ

里ハ、四五間モ岩石ヲソノマ、ニ切ツケ石壁トナセルアリ。三根村ニハアスナロウヲカリコミタルモヨシ、又古人山桜ヲ植シ家モアリ（近藤 1964:305-306）

上記文中では大賀郷（大岡郷）、三根、檜立としか書かれていないが、本稿で主に扱う中之郷地区も「大風」を怖れることに違いはなく、引用に見られるのと同様な風対策がなされてきた。

八丈島測候所の報告では、八丈島の年平均風速の平年値は 5.6m/s、東京のそれは、3.3m/s となっており、八丈島の方が 2.3m/s 強い。また、日最大風速が 10m/s を超える日数は、年間 146.6 日と 4 割を占め、数字の上からも、実際八丈島は風が強く、そのための各種対策が必要とされる自然環境にあるということが窺える（八丈島測候所 2008:17）。

四季ごとの風向に関しては、春・夏・秋の風向きは類似しており、東北東の風と西南西の風が主風向で、それ以外の風は、ほとんど吹かない。一方、冬季は圧倒的に西風が主風向で、その他の風は全くといってよいほど吹かない。日平均風速、日最大瞬間風速の極値は、夏から秋にかけて記録する年が多いが、この要因は台風となっている（同上:17）。

強風による被害は、台風、低気圧、前線通過時、雷雨などにより発生する暴風、強風、突風により起こる。八丈島は高気圧に覆われる夏季を除いて、一般に風が強いのが特徴であるが、他の地域と比較して風対策がなされているので、強風の割には被害が少なくなっている（同上:47）。

風の伝統的な対策法については、先に引いた近藤富蔵の『八丈實記』に見られる通り、石垣を築き防風林を植える形である。近年では、コンクリートで土台を固めた家が多いので、防風林を切ってしまう家も多いと聞く。

3 事例

3-1 上浦の K 家のイシバサマ信仰

中之郷地区は、東山（三原山）の南斜面上に集落が形成され、その中でも上浦は標高 200m 前後の比較的高所に位置するコーチである。K 家は、中之郷地区を最初に開拓したシチケンザイシヨ（七軒在所）と呼ばれる家柄の一つで、現在の地に住まれて 300 年程であるという。現屋敷地付近には、中世、三浦家の武家

バサマの回りには、この地域の元の植生に近い森が、北西から南西にかけて広がっており、ここをチョウヤマということがあった、と先の K.Y は言う。先行研究の中で野村が「チョウヤマの様相を残している」一軒の家と指摘するのは、この K 家のことである。

イシバサマを覆う森の木は、高さ 17、8 メートルのスダジイと 15 メートル程のタブの木を主体として、10 メートル程のヤブツバキ、5 メートル程のヒサカキから形成される（写真 2 参照）。



(写真 2 右手主屋の奥に広がるのがイシバサマを覆う森)



(写真 3 正面奥に見えるのが「観音堂」)

屋敷地の北東部には、二畳程の広さの「観音堂」があり(写真3参照)、中には、「観音堂」に向かって左から次の七体のホトケが祀られる。バトウカンノン、カンノンサマ、カンノンサマ、オシヤカサマ、オジゾウサマ、テンジンサマ、オシヤカサマⁱⁱⁱ。また、この「観音堂」と隣接するI家との境界(K家にとって北東から東、I家にとって北西から西)にも、I家の屋敷神^{iv}が祀られ、このカミが祀られるこんもりとした山をカミヤマ(神山)、そこに生える樹木をモリキ(守木)と称している(写真4、5参照)。



(写真4 I家の屋敷神)



(写真5 人物の左手の森がカミヤマ)

K家では、イシバサマ以外に、中之郷地区の各所に祀られる以下の民俗神を守り、正月にゴヘイ（御幣）を上げている。

- ・タメトモサマ
- ・トウゲノカミサマ
- ・ジノカミサマ
- ・ジノカミサマ

上記のジノカミサマであるが、東山山麓に祀られるものと、中之郷地区の三島神社に合祀されるものの2体を守っているという。

はじめにでも触れたように、K.Yはカミを祀り・守ることを次世代に伝えようとしている。K家を継ぐ予定であるK.Yの長男も、上記のカミやホトケの祭祀を絶やさないようにしていくつもりであるとのことである。

次にK家におけるイシバサマの祭祀形態とイシバサマに関わる伝承についてみていきたい。

まず、祭祀形態であるが、イシバサマには、優婆夷宝明神社（八丈島の総鎮守社）の宮司に切ってもらったゴヘイを正月に捧げる以外には、特に何もおこなわないという。

続けてK家のイシバサマに関わる伝承を4点あげる。

①先の野村の引用文中においても指摘されているが、K家のイシバサマは、一旦、中之郷地区の氏神である三島神社に合祀された。しかしある時、イシバサマは、三島神社にいることを嫌がっているとのミコによる託宣があった。そこで、屋敷地の元の場所に戻され、今に至っているとのことである。この言い伝えがあるため、多くの家が三島神社にイシバサマを納めた今でも、K家では合祀を考えていないという。

②イシバサマを含む周辺の森には普段立ち入ることをしないという。禁足地という程ではないものの、むやみやたらに出入りする場所ではないという言い伝えや意識はあるとのことである。

③イシバサマのある森の木は切ってはいけない。切ると何かある、バチが当たる、とされている。例えば、台風による倒木があった際にも、基本的には手を付けない。木がイシバサマの上に倒れ込んだり、倒木を片付けないと、森が荒れる可能性のあるときには、仕方なく、先の優婆夷宝明神社宮司に拝んでもらってから切って、片付けるという。こうした、徹底した禁伐をおこなうのには、父がなくなった際の体験が、K.Yに大きな影響を与えているという。以下にその体験を

記しておく。

1952年、道路の拡張のために「イシバサマの森」vの一部を切り崩したことがあった。その影響か、翌年2月に父が突然体調不良となり、白血病と診断され、同月中に亡くなった。1952年には、中之郷地区で7人の人が亡くなるという土砂崩れがあり、その大災害復旧のための土木作業に父は従事していた。元気で健康そのものであったのに、突然病になり、あっという間の死であった。父は農薬を扱う仕事をしていたので、それが原因であるという人も多くいた。しかし、当時敷地内に住んでいた叔母が、「イシバサマの森」に手をつけたために父を殺した、と叫び声を上げていたのを、よく覚えているという。K.Yは、「イシバサマの森」に手を入れたのが、本当に原因であるかどうかは分からないが、あまりにタイミングがあっているので、怖い気持ちもあり、それ以来、「イシバサマの森」には手を付けないでいる、と言う。本当は、森が崩れてきているので、回りを石垣で囲いたいのだが、そのためには「イシバサマの森」を切り崩さねばならず、できないでいるとのことである。

④かつて東山には湖があり、それが決壊し大きな山津波が起こった。その時、K家の人は、この森に逃げて助かったとの言い伝えがあるとのことである。K.Yによると、実際、湖がかつて存在した形跡が地層にみられるという。

また、これはk家のイシバサマの伝承ではないが、先に触れたI家との境界にあるカミヤマにも禁伐伝承があるとのことである。

K.Yによると、昨年(2014年)、このカミヤマの森の木が倒れた時、倒木を切った人が自身の不注意からポート事故にあった。普段慎重な人なのに、と思っていると、さらに病がその人を襲った。カミヤマのモリキを切ったからではないかと、モリキを切るのは改めて怖い、と思ったという。

3-2 粥倉のK家のイシバサマ信仰

この家では、イシバサマは、母屋からみて、やや南西方向の屋敷地の角に祀られている。K家の現在30歳代前半の男性の話では、子どもの頃にイシバサマが祀られている辺りでは遊ぶなどと言われていたという。また、うっかりイシバサマの辺りでふざけていたりすると、強く怒られたという。また、イシバサマの木を切ってはいけないという禁伐伝承もあるが、必要に迫られ、イシバサマ周辺の木を伐採することはあるとのことである。大人になった今でも、イシバサマは何だか怖いという。

K家の屋敷地には、イシバサマの他に、八丈島・青ヶ島にみられる民俗神であるカナヤマサマが母屋の南に祀られる。これは、祖母が、皮膚病になったときにミコから祀れといわれて祀ったカミで、イシバサマとは違うとのことである。

3-3 中里のK家のイシバサマ信仰

この家には、高倉が残るなど、伝統的な八丈島の屋敷地の形態を残している。現在、母屋の南西方向に「石場様」と彫られた石の小祠が二体祀られるが、回りは雑草に覆われ、忘れられた存在である。イバサマの木を切ってはいけないという禁伐伝承は残っている。そのため、木の伐採はおこなわれていない。

4 考察

今回の調査では、イシバサマは屋敷地の西の側面に祀られていることが多く、イシバサマ周辺に形成された森には禁伐伝承が伴っていた。それとともに、禁足的な面を併せもつ事例もみられた（上浦のK家の伝承②、粥倉のK家の伝承）。またこれら、禁伐・禁足的な伝承には、イシバサマに対する強い畏怖が付与されていた。

中之郷地区は特に西の風と東北の風が怖いとされており、上述の調査結果と併せ考えると、イシバサマ信仰は、「畏れ」という心性を背景に、森を維持し、これらの風を防ぐ機能を果たしているといえよう。また、上倉のK家の事例にみられるように、イシバサマ信仰と類似するカミヤマ信仰は、I家の屋敷地を北西乃至西の風から防ぐ機能だけでなく、結果としてK家の屋敷地を北東乃至東の風から防ぐ機能をも果たしていると考えられる。このことより、イシバサマ信仰乃至類似の信仰が重なることにより、防風の機能が強化され、ひいては地域全体に防災の「システム」が形成されていた可能性が伺えるが、現時点では、可能性の示唆に止めておきたい。

また、上浦のK家の伝承①④は、イシバサマを、そこに祀ることの必要性・その「場」の重要性をK家の人に認識させる機能を果たしていると考えられる。

こうしたさまざまな伝承が累積していくことにより、カミを祀り、守っていこうとする意識は強化されていくといえよう。

尚、先のK家の伝承④からは、防風のみならず山地崩壊を防ぐ機能をもイシバサマ信仰が果たしていた可能性があることを一応指摘しておく。

おわりに

かつて中之郷地区には、「風の通り道」があり、そこには家を建てなかったとする伝承も当該地区の調査の中で聞かれたが、その明確な道筋を確認することはできなかった。「風の通り道」とイシバサマ信仰が担保する防風の機能との関係は、今後の課題としておきたい。

また、上浦のK家が祀り、守るカミは、本文中に記述した通り、イシバサマ以外にもあり、それらのカミを祀り、守ることが、水源地の保全や山地崩壊防止と関わってきている可能性が強い。

こうしたカミを媒介とした自然環境との相渉の諸相についても、併せて今後の調査課題としておきたい。

註)

- i 八丈島と類似するイシバサマ信仰は、1969年に全島民の離島により無人化した八丈小島にも見られた。また、青ヶ島には現在も見られる。
- ii この図は、K.Yの手控え及び、それを元に描かれた（森 2009:48）の図より作成した。
K.Yによると、江戸期のK家の様子を伝承に基づいて書いたものであるという。隠居屋の存在やタビ小屋（他火小屋、生理や妊娠時に籠る小屋）、高倉などが記され、伝統的な八丈島の屋敷地の形態を示す図となっており、資料的価値も高い。
イシバサマとその回りの森の様態は現在に至るまでほぼ変らない。また、主屋、「観音堂」の位置や、回りの樹木の様態も同様である。但し、隠居屋、タビ小屋、高倉などは、現在なくなっている。
- iii K家の「観音堂」を持仏堂と捉える研究もある。それに関しては、（森 2009）を参照されたい。
- iv イシバサマとは呼ばれていないが、モリギの根元に御幣があげられている。
- v イシバサマを含むその周辺の森のことをK家ではこのように呼ぶことがある。

引用・参考文献

- 大間知篤三 1951『八丈島－民俗と社会－』創元社
- 大間知篤三・金山正好・坪井洋文 1966『八丈島』角川書店
- 近藤富蔵 1964『八丈實記 第一巻』緑地社
- 直江廣治 1966『屋敷神の研究 - 日本信仰伝承論 -』吉川弘文館
- 東京都八丈島八丈町教育委員会編著 1993『八丈島誌 改訂増補版』東京都八丈島八丈町役場
- 鳥越皓之編 1994『試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから』雄山閣出版社
- 野村亜子 1974「信仰」『文化財の保護(第6号)特集 八丈島民俗資料緊急調査』東京都教育庁社会教育部文化課
- 野本寛一 1990『神々の風景 信仰環境論の試み』白水社
- 2004「禁伐伝承と入らずの森」『探求「鎮守の森」社叢学への招待』平凡社
- 2010『地霊の復権 自然と結ぶ民俗をさぐる』岩波書店
- 八丈島測候所 2006『八丈島の気象百年』
- 2008『防災の手引き』
- 森隆男 2009「持仏堂から仏壇へ－八丈島の事例から－」『民俗建築』(136)日本民俗建築学会

付記 八丈島の園芸家・自然ガイドの菊池義郎氏には、本稿執筆にあたり多くの示唆を受けるとともに、調査の協力にもあずかった。書面を借りて御礼申し上げる次第である。